漢學索引集成

蔣致遠 主編

中國隨筆雜著索引

宏青圖書公司印行

中國隨筆雜著索引

佐伯富 編

京都大學東洋史研究會刊

1960

中國隨筆雜著索引　　佐伯富編

中華民國75年10月初版

出版者：宗青圖書出版公司

發行人：蔣致遠

發行處：宗青圖書出版公司
台北郵政22034號信箱
電話：(02)941-4553
郵政劃撥第0119411-8號
局版臺業字第1825號

精裝1冊　　定價新台幣1,600元

INDEX
TO
CHINESE ESSAYS AND MISCELLANEOUS WRITINGS

TOMI SAEKI

Published by Society of
Oriental Researches
Kyoto University

1960

ORIENTAL RESEARCH SERIES No. 7

INDEX TO CHINESE ESSAYS AND MISCELLANEOUS WRITINGS

BY

TOMI SAEKI

PUBLISHED BY THE TŌYŌSHI-KENKŪ-KAI
THE SOCIETY OF ORIENTAL RESEARCHES
KYOTO UNIVERSITY
1960

PRINTED BY THE NAKAMURA
PRESS CO., LTD. KYOTO.

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

代 序

本書可說是佐伯教授先前所編著出版之「中國隨筆索引」的續編。不過在性質上，正編與續編並無所謂價值之不同，只是出版的先後順序有別罷了。前後兩編的問世，正足以收相輔相成、彼此輝映的效果。然而，爲免續編被誤解成純係正編的補充資料，因此本書不採用續編的稱呼，而逕以「中國隨筆雜著索引」命名。如此一來，「中國隨筆索引」若是屬於正編的話，本書即爲其續編；而如果本書是正篇的話，「中國隨筆索引」即爲其續編。

首先出版的「中國隨筆索引」，可以說也是克服了重重的困難才付梓問世。面對汗牛充棟的中國文獻，若一味掩面嘆息而不動手去研究，並不是辦法。將這些文獻加以整理，並使讀者易於利用它來從事研究，即是作者的初衷，因此作者排除萬難，大胆地推出該書，此舉可謂饒富意義。當然，作者也暗自期盼能對該書增補進一步的資料。迄今，作者的此一期望終於如願達成。只要過目本著作收藏書目的一覽表，就可以看出如宋江少虞的「皇宋事實類苑」、明楊愼的「丹鉛總錄」、明沈德符的「野獲編」、清錢大昕的「養新錄」、清王士禎的「池北偶談」等，都是「中國隨筆索引」所沒有列出的重要資料。相信各位讀者看到這樣的內容，必定覺得雀躍不已。尤有甚者，清末徐珂的大作「清稗類鈔」亦記載在其中，可謂難能可貴。當然，這並非一部絕對完整的著作，相信作者往後仍會陸續補充相關的資料才對。

本書的編著方法與「中國隨筆索引」一樣，係採用五十音順序來

編排。可能有人認爲用四角號碼或中國字庋擷編著較好，但是對日本人來說，仍是以採用五十音順序的方法來排列，比較方便利用。不過在本書的後部，亦附有筆劃索引，因此不習慣日本音的外國人，亦可運用自如。

「中國隨筆索引」深受學術界的歡迎，但銷售册數並不盡如人意。唯值得一提的是，購買對象皆屬高階層的知識份子，如漢學學者，廣泛地從事文學及史學的研究者；甚至從海外亦有著名的大學院校來函訂購，還有購買者深恐向隅特地要求無論如何爲他留一册的情形。相信「中國隨筆雜著索引」不會比「中國隨筆索引」遜色，一定能受到諸位讀者的青睞。

1960 月 6 月

京都大學東洋史研究室

宮崎市定

自 序

宋代印刷術相當發達，知識階級大量興起，各種記錄及著作急遽問世。因此，欲研究宋代以後的中國社會諸現象，往往爲了龐大史料的收集問題而煩惱不堪。就筆者的經驗而言，不但收集史料耗時費日，欲體會其內含及其意義亦是困難重重。筆者有鑑於此，乃殫精竭慮，將這些龐大的史料加以整理，以免其他的研究者爲了收集資料而浪費時間與精力；也希望能提供給研究者充分的史料，俾便他們做專心的研究，這是筆者多年來的心願。中國隨筆索引及本索引，就是基於筆者的這分心意而編著完成的。

這些索引裡所羅列的隨筆雜著，在浩瀚的中國書海中可謂相當少，仍需繼續作較完整的整理的書籍，爲數仍多，奈何筆者個人的能力十分有限。然而若所有漢學研究者都耗神費事地重複從事同樣的工作，那就難望能在這領域裡有所進益了。因爲史料的收集固然是研究的第一步，但是如何去體會史料中所包含的意義，則是更爲重要的事。

今日，學問正以日新月異的速度進展，光憑個人的能力實無法臻於極致。如果能透過多數人有計畫、有組織的互相協助來整理史料的話，就容易多了。不過，人文科學與自然科學不同，因爲人文科學無法像自然科學一樣，自始至終均由集體研究來獲致成果。人文科學涉及個人的主觀及史觀，因而對於史料的解釋常會出現歧異之處。所以，筆者並不贊成從頭到尾以集體方式進行研究，毋寧說，到了某一階段之後，還是由各人個別地從事研究，較爲恰當。不過，史料的蒐集和整理，縱使在史觀和主觀上互有差異，但在一定程度內進行集體研

究仍大有可爲。

因此，筆者藉著這個機會，也希望能有更多的年輕漢學研究者運用有系統的方法來收集和整理史料。本書如果能對這樣的計畫之推動有所貢獻，則筆者甚感榮幸。

本索引可說是上述「中國隨筆索引」的姊妹篇。「中國隨筆索引」只不過屬於目錄的索引；本索引則不僅是目錄，並且還以五十音的順序，來排列本文中的一些重要項目。本索引除收錄前編所未收錄的項目，再加上更精心摘錄的項目，合計八萬餘項。爲完成這部索引，前後共花了十年的時間，畢竟這並不是只製作索引的工作。筆者利用研究之餘不斷充實其內容，本來只想將目標限定在最重要的項目，但隨著摘錄範圍之擴大，筆者的欲望也跟著增大，因而在項目的選定上，難免有粗陋之處，此點尚祈諸位研究者多多諒察。在選定清稗類鈔的項目時，就有這類情況發生。由清稗類鈔的索引來看，清稗類鈔實可視同清朝時代的百科辭典。清朝的研究者可以充分地加以利用。

本索引能夠出版問世，得力於哈佛大學燕京研究所巨額贊助金的補助；也受到推薦筆者給該研究所的東方學研究日本委員會，特別是該委員會的宮崎市定、吉川幸次郎兩位教授的鼎力相助，特此致謝。又承蒙恩師宮崎教授爲文作序、大阪市大內藤乾吉教授揮毫題字，無盡感激。此外，本書之付梓，也得到梅原郁君等大學院學生們，以及山名玲子、田中久子兩位小姐的援助，還有中村印刷公司的襄助，筆者在此特別對以上諸君表達由衷的謝忱。

1960年7月5日

京都大學東洋史研究室　佐伯富

凡 例

1.本索引將下列46種書籍的目錄，以及書中的重要項目，用五十音順序排列出版。爲了方便檢索起見，把以同樣文字起首的，都集成一處。又，一個目錄中若包含有數個小項目時，即在每一個小項目下劃線註明，並依照各該項目的音的順序來排列。如果屬於同音，便以筆劃的多寡順序排列；假使既同音又同筆劃，就依照康熙字典的文字排列順序加以排列。

2.項目的頭一個字是漢音，則第二個字以下原則上也用漢音，不過，有些地方也以慣用音來排列。

3.有關所介紹項目的書名，同類項目，按年代順序排列。至於較近代的書籍，爲了便於檢索，字數較少的項目，排在同類項目之前。

4.（ ）括弧中的項目，是表示書籍的目錄；其左側的項目，是表示與目錄有關之文章內的項目。

5.項目中〔 〕括弧裡的文字，是筆者刻意補充的註解。

6.音較不容易分辨的項目，統一以筆劃別排列在書的末尾。

7.所引用的書籍如下。

略號	書名	卷數	年代	編著者
雲	雲間據目鈔	5	明	范濂
演	演繁露	16	宋	程大昌
演續	演繁露續集	6	宋	程大昌
花	花當閣叢談	8	明	徐復祥
鶴天	鶴林玉露天集	6	宋	羅大經

略號	書名	卷數	年代	編著者
鶴地	鶴林玉露地集	6	宋	羅大經
鶴人	鶴林玉露人集	6	宋	羅大經
學	學林	10	宋	王觀國
蜷	蜷廬隨筆	不分卷	清	王錫琛
韓	韓門綴學	5	清	汪師韓
韓續	韓門綴學續編	不分卷	清	汪師韓
金陵	金陵瑣事	上下	明	周晖
稽	稽神錄	6	宋	徐鉉
稽拾	稽神錄拾遺	不分卷	宋	徐鉉
稽補	稽神錄補遺	不分卷	宋	徐鉉
古事	古今事物考	8	明	王三聘
吾	吾學錄初編	24	清	吳榮光
庚	庚巳編	10	明	陸粲
皇類	皇朝事實類苑	78	宋	江少虞
麗	麗史	上中下	宋	王得臣
十	十駕齋養新錄	20	清	錢大昕
十餘	十駕齋養新餘錄	上中下	清	錢大昕
春	春渚紀聞	10	宋	何薳
焦	焦氏筆乘	6	明	焦竑
焦續	焦氏筆乘續集	8	明	焦竑
水	水東日記	40	明	葉盛
吹	吹網錄	6	清	葉廷琯
清	清嘉錄	12	清	顧鐵卿
清類	清稗類鈔	92	清	徐珂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

略號	書名	卷數	年代	編著者
叢	叢林雜俎	上下	明	談遷
丹	丹鉛總錄	27	明	楊愼
池	池北偶談	36	清	王士禛
聽	聽雨軒筆記	4	清	徐德清
投	投轄錄	不分卷	宋	王明清
東志	東坡志林	5	宋	蘇軾
南	南滸楷語	8	清	蔣超伯
梅	梅溪叢話	上下	清	錢泳
野獲	野獲編	30	明	沈德符
野補	野獲編補遺	4	明	沈德符
柳續	柳南續筆	4	清	王應奎
留	留青日札	4	明	田藝蘅
隆	隆平集	20	宋	曾鞏
龍	龍川略志	10	宋	蘇轍
梁	梁溪漫志	10	宋	費袞
浪	浪蹟叢譚	不分卷	清	梁章鉅
浪續	浪蹟續談	不分卷	清	梁章鉅

序

本書は先に佐伯教授が編著して世に問うた「中國隨筆索引」の續編とも言うべきものである。但しこのような書物の性質として，正編と續編との間に別に價値の相違があるわけのものではない。早く出た方が正編で，後れて出た方が續編になるにすぎない。互いに相俟ち相助けて一層その效用を完全にするものである。だが世間では兎もすれば，續編は正編の補遺にすぎぬような誤解を生じないとも限らぬので，本書はことさらに續編の名を避けて「中國隨筆雜著索引」なる名を冠することとした。彼が正ならば此は續であるが，此が正ならば彼が續になるのである。

前に出た「中國隨筆索引」も實は最初から完璧なるを期し難かつた。實際に汗牛充棟もただならざる中國文獻の堆積を前にして，いたずらに手を拱いて歎息してみても始まらぬので，いくらかでもこれを利用し易いように整理しておこうというのが，著者たちの伴らない心境であつたであろう。だから其後の批評者の言をまつ迄もなく，相當重要なもので落ちているのもあることは避け難かつた。それは窃かに他日の增補を期していたからであつて，今日に至つて所期の一部は實現されたわけである。本書の收載書目を一覽しただけで，宋江少虞の「皇宋事實類苑」，明楊愼の「丹鉛總錄」，明沈德符の「野獲編」，清錢大昕の「養新錄」，清王士禎の「池北偶談」など，前書に洩れた重要資料が揃つて含まれているのを見て，安心される讀者も多いことだろうと思う。殊に清末徐珂の清稗類鈔のような大

部なものが入つているのは何としても有難いことだ。もちろんまだこれで十分というわけには行かないが，なおおいおいと追加されることを期望する。

本書の體裁は一に前書により，五十音順に項目を排列してある。或いは四角號瑪，或いは中國字庋擱でという注文もあるであろうが，日本人にはやはり五十音順が親しみ易いという理由からであろう。但し卷末にある字劃索引によつて，日本音に不馴れな外國人にも，一應は支障なく利用され得ることと思う。

前書は學界から非常な歡迎を受けた。とは言つても部數にして見れば大したものではない。ただ若し誇りとする點があるとすれば，それは限られた數ながら客筋が滅法よいということだろう。前書の注文者の顔ぶれには單に中國學學者ばかりでなく，廣く文學，史學に從事する眞面目な研究者が多く，遠く海外の有名大學から引きもきらず問合せがあり，中には是非一部をと所望されて，とつておきの豫備品を用立てたこともあるという。本書も恐らく前書に劣らぬ，靜かな歡迎を讀書界から受けるであろうことを期待する。

昭和35年6月

京都大學東洋史研究室において

宮　崎　市　定

はしがき

宋代印刷術が發達し，知識階級が増大すると，急激に諸種の記錄や著述が増大した。そこで宋代以後の中國社會の事象を研究しようとする者は先ず尨大な史料に惱まされる。史料蒐集に時間と勞力とを費し，充分に史料を吟味し，廣い立場から史料を翫味精讀することが困難であるというのが一般的な狀況ではなかろうか。少くとも私の乏しい經驗はそうであつた。そこでこれらの尨大な史料を何とか整理して研究者が史料蒐集にだけ追いまわされることなく，史料を充分に味讀し，靜かに考える餘裕を作りたいというのが私の年來の念願であつた。中國隨筆索引や本索引の作成はかかるささやかな念願から出來たものである。

ところで，これらの索引にもられた隨筆雜著の數は極めて僅少である。まだ整理しなければならぬ書物は無數にあるが，個人の力には自ら限度がある。史料蒐集のために，汗牛充棟もただならぬ書物を，中國研究者がいつも同じ操作を繰り返して時間と勞力とを空費していては進步は望めない。史料の蒐集は研究の第一步であるが，史料のうちに含まれる意味を汲みとることは更に重要である。

現今學問は日進月步の勢いで進步している。個人プレーではもはやついてゆけぬというのが現今の狀況ではなかろうか。多數の人が組織的に計畫を立てて協同すれば，史料の整理は案外容易である。ただ人文科學は自然科學のように最後まで協同研究にゆだねることはむずかしい。個人の主觀や史觀によつて史料の解釋に相違がある

からである。私は最後までも協同研究をすることを慫慂しない。むしろ，ある段階以後は各人の個別的研究をこそ望みたい。しかし，史料の蒐集と整理とは，いかに史觀や主觀が異つていても，ある程度までは協同研究が可能である。

そこで私はこの機會に若い多數の中國研究者が組織的に史料の蒐集と整理とに乘り出されることを強く期待したい。本書がそのような計畫立案の端緒にでもなれば，編者の欣びこれに過ぎるものはないであろう。

本索引は先に上梓した中國隨筆索引の姉妹篇である。前索引は目次のみの索引であつたが，本索引は目次のみならず，本文中の重要な項目をも摘錄して目次とともに五十音順に排列した。本索引は前篇に收容しきれなかつた項目と，その後，引續き摘錄した項目とを併せると八萬餘に及んだ。この間十年の歲月が流れた。もつとも絶えず索引作成ばかりにかかつていたわけではない。研究の餘暇の短い時間を利用したのである。最初は最も重要と思われる項目に限定していたが，進捗するにつれて慾望が增大し採錄の範圍が擴大した。項目の選定に精粗があるのはこれがためで，この點研究者の諒恕を請わなければならぬ。最後に項目を選定した清稗類鈔の項目數が全體の半ばにも達したのは如上の理由によるものである。清稗類鈔の索引のごとき觀があるが，清稗類鈔は清朝時代の百科辭典のような書物であるから，清朝研究者には相當利用していただけるであろう。

本索引が出版せられることになつたのは，ハーヴァード燕京研究

所の多額の助成金の賜であるが，同研究所に推薦していただいた東方學研究日本委員會，ことに同委員，宮崎市定・吉川幸次郎兩教授の御配慮によるところが多い。また恩師宮崎教授からは序文をいただき，巻頭を飾るを得，大阪市大内藤乾吉教授からは題簽の揮毫を賜わつた。本書の作成にあたつては，梅原郁君外大學院學生諸君や山名玲子・田中久子兩孃の援助ならびに，中村印刷會社の好意を受けた。ここに特記して心から感謝の意を表する。

昭和35年7月5日

京都大學東洋史研究室において

佐　伯　富

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com